巻頭言

ドーピング資本主義の時代

杉本貴志
関西大学商学部

在外研究で1年間、資本主義の母国イギリスに滞在した。かつて資本主義の盟主であったこの国は、「第三の道」を掲げる労働党政権のもと、再生をめざして、ヨーロッパ型資本主義（＝抑制された競争主義）とアメリカ型資本主義（＝競争至上主義）のあいだを揺れ動いてる。一方では、街中の商店は午後5時過ぎにもなればほとんどが閉店してしまうし、他方では、24時間営業の郊外型スーパーストアを展開する巨大チェーン「テスコ」が全消費の実に3割のシェアを獲得しているのである。イラク問題と同じく、経済においても、大英帝国はアメリカにつくか、ヨーロッパ側にまわるか、悩んでいるかのようにも思われる。

そんなイギリスから戻ってきて、久しぶりに目にした日本の資本主義は、間違いなくむき出しの資本主義、悩みなき競争至上主義の経済だった。留守のあいだにすっかり有名人となったらしい新興IT企業の社長が、頻繁にテレビに出て、自家用飛行機を自慢したり、高価な料亭にテレビカメラを招き入れたりしていて、成金ぶりを見せつけている。もちろん、そういう人間はいつの時代にも存在するのだろうが、それが相当数の世間の人々、とくに若者達から支持され、憧憬されているというのである。障害者用バリアフリー設備を勝手に撤去していると追及されたホテルチェーンの社長が、「あんなものは邪魔だったから」とあっけらかんと居直っていたのは、些かひどすぎるとはいえ、そうした時代の空気を反映している。ひょっとしたら件の社長は、自分の態度は率直で正直だとして世間の賞賛を受けるのではないかと期待あるいは想像さえしていたのかもしれない。

耐震偽装の問題もそうである。地震が起これば簡単に崩壊しかねないような建物を造って売ってしまえば、いったいどういうことになるのか、普通ならわかりそうなものであろう。いくら競争がきびしい、カネが大事だからと言っても、そこまでやったらおしまいだと、まともな感覚を持っていたら考える筈なのだが、そんなことさえ平気でまかり通ってしまう。残念ながら、われわれが暮らすのはそういう経済、そういう社会なのである。

かつてイギリスに生まれた競争主義の社会＝資本主義経済は、宗教家を初めとする良識ある人々から、カネ儲けしか考えない不道徳な社会だと非難された。それに反対して立ち上がったのがアダム・スミスである。スミスは、フェアプレーの精神に則った競争であるならば、それは決して害あるものではなく、社会を進歩させる原動力なのだという。パン屋は貧者のことを思って良質なパンを焼き、安価で売るのではなく、売り上げを伸ばそうとしてそうするのである。ここから彼は政府による経済規制を無用な干渉として批判し、後世の人々は彼を自由放任論者と呼ぶようになる。しかし彼が肯定した自由競争とは、あくまで参加者全員のフェアプレーを前提とした競争だった。

要するにスミスの言う競争とは、スポーツの世界、たとえばオリンピックのような美しいフェアな競争だった、と言いたいところなのだが、そのオリンピックも今や理想郷ではないようだ。大々的に警察まで動員したトリノ五輪のドーピング摘発劇は、参加することに意義がある牧歌的な世界から、勝つためには手段を選ばない世界へとオリンピックが変わっていくことに対する、理想主義の精一杯の抵抗だろう。しかし、あらゆるレベルでのスポーツの商業化、それを受けての商業五輪化＝オリンピックの資本主義化が進むなかで、そうした抵抗をどこまで貫くことができるだろうか。

かつては、五輪へのプロ選手の参加は決して認められなかった。スポンサー企業から援助を受けただけで大問題となり、五輪から排除された有名選手もいたのである。しかし今や若い人々はそんな歴史を知らないだけでなく、なぜプロが問題となったのかさえ、全く理解できないだろう。それと同じように、体には安全だが身体能力を高めるという薬が次々に開発されて、ドーピング検査など無用だと主張される時代、それを摂取することが記録を向上させるためには不可欠なのだから当然薬を認めるべきだとされる時代が、もしかしたらやって来るのかもしれない。

フェアプレーの競争社会、スミスが理想とした競争経済とは、何なのだろうか？